

「佳人 再びは得難し」

——張悦然初期短編小説〈豎琴，白骨精〉試論——

杉 村 安幾子

1. はじめに

今年（2012年）9月14日、法政大学国際文化学部のホームページに「日中青年作家会議 2012」の開催中止の通知¹がアップロードされた。「日中青年作家会議 2012」は法政大学国際文化学部及び中国社会科学院が主催の、日中の若手作家の交流を主たる目的とした学術会議であり、中国側の作家として来日予定であった作家は、閻連科・ツェリンノルブ・金仁順・魯敏・葛亮・李浩・徐則臣・張悦然・韓松・周嘉寧・李修文の11人であった。中止に関しては中国側が延期を申し入れたとのことであるが、当時日本国内外を騒がせていた尖閣諸島国有化の問題が影響したことは明らかであった。

中国側の来日中止に、日本側の作家が「尖閣諸島と自分たちの文学活動に何の関係があるのか」と訝しく思ったであろうことは想像に難くないが、日中青年作家会議の中止は、学術や文学という一見非政治的な営為も公的な文脈の中ではいくらかでも政治性を帯びてしまうという現実を、皮肉にも鮮やかに示したと言える。

政治外交問題はさておき、来日予定であった作家のうち張悦然は「美女作家」と称される一群の一人である。中国における「美女作家」現象は中国の激化する経済発展の一種のシンボリックな里程標に過ぎなかったが、中国本国では今なお有効なキーワードである。《上海宝贝》（春風文芸出版社1999年9月）²の刊行とその発禁処分で一躍世界的に有名になった衛慧ら「美女作家」が、主に1970年代に生まれていることによって、彼らを指す語として「七〇後」という

タームが生まれたが、すぐ1980年代生まれの作家群「八〇後」が誕生した。作家の若年化・低年齢化は更に進み、12歳や13歳、甚だしきに至っては6歳でデビューした者³もいるという。こうした現象の背景としては、作家が作品ではなく、容貌や年齢を「売り」にするという文学の商品化が指摘されている⁴。

「八〇後」作家には、少年作家ブームの嚆矢を放った韓寒や郭敬明、春樹などが挙げられるが、張悦然もその一人である。1982年生まれの彼女はデビュー当時は「美少女作家」と呼ばれており、作品刊行時に自らのポートレートを著者紹介欄や表紙、扉絵に用いるなど、彼女自身「美少女」としてのセールスポイントを大いに利用してもいた。30代になった現在は、「美少女作家」から「美女作家」の継承者とへと呼称が替わりはしたものの、決してビジュアル人気だけではなく、幅広い読者層からの支持を得つつ、執筆活動を続けている。

張悦然の作品は、彫琢を経た修辞、ロマンチックな雰囲気と寂寥感、悲劇的結末が特徴とされる。これに対しては莫言から「小説の中で自我に浸りすぎている」という自己愛的傾向を指摘されてもいるが、一方でそれが作品の魅力ともなっている。莫言も基本的には「彼女の文章表現は鋭く巧みで、簡潔であり、モダンでしかもある水準に達している」と評価している⁵。評論家白燁に「物語は依然として物寂しい美しさのあるものだが、愛に対する理解がより深まっている」、「芸術表現において鋭い叙述と血生臭い文章表現は、すでに張悦然の芸術的手腕がより強靱に、より力強くなったことを感ぜしめるものとなっている」⁶と評された短編〈豎琴，白骨精〉も、張悦然作品の主な特徴たるロマンチックな雰囲気、寂寥感、悲劇的結末を全て備えている。

張悦然自身は〈豎琴，白骨精〉について、アンデルセン『人魚姫』の翻案であると述べている⁷。作品の内容が似ている訳ではないが、愛情を得るがために自らの身体の一部を代償にするというモチーフの面から見れば、なるほど通底している。しかし、実はもう一方で張悦然が明確には意識していなかったと思えるもう一つのモチーフを、中国古代のエピソードに指摘することができる。本稿では、この二つのモチーフと張悦然の初期作品を通して〈豎琴，白骨精〉の作品世界を検討してみようというものである。

2. 作者と作品

まず、作者張悦然と〈豎琴，白骨精〉について大枠をとらえておく必要があるだろう。張悦然は山東省済南生まれ。山東大学に学ぶが、後にシンガポール国立大学に留学し、情報技術専攻を卒業。中国伝媒大学メディア専攻修士課程修了。北京語言大学で古典文学を専攻し博士号を取得。今秋から人民大学文学学院で教鞭を執り始めた。14歳から《収獲》《人民文学》《花城》などの文芸誌に作品を発表し始め、2001年第三回全国新概念作文コンクールで一等賞を受賞。現在30歳にして、作家として既に15年以上ものキャリアを持つ。2002年には青少年を対象とした文学雑誌《萌芽》のサイトにおいて、「最も才能の豊かな女性作家」と「最も人気のある女性作家」に選ばれ、2008年度“茅台杯”人民文学賞優秀散文賞を受賞。作品には長編小説《櫻桃之遠》（春風文芸出版社2004年）、《是你來檢閱我的憂傷了嗎》（上海訳文出版社2004年）、《紅鞋》（上海訳文出版社2004年）、《水仙已乘鯉魚去》（作家出版社2005年）、短編小説集《葵花走失在一八九〇》（作家出版社2003年）、《十愛》（作家出版社2004年）、《誓鳥》（光明日報出版社2006年）がある。2008年には「孤独」「嫉妬」といったテーマを据え、それに沿った書き下ろし作品を掲載する不定期刊行文芸誌《鯉》を創刊し、自ら主編を務めている。日本では〈豎琴，白骨精〉、〈二進制〉、〈黒猫不睡〉、〈家〉、〈老狼老狼幾点了〉⁸が翻訳紹介されている。

短編集《十愛》は、〈跳舞的人們都已長眠山下〉、〈豎琴，白骨精〉、〈吉諾的跳馬〉、〈二進制〉、〈小染〉、〈船〉、〈鼻子上的珍妮花〉、〈昼若夜房間〉、〈宿水城的鬼事〉、〈誰殺死了五月〉の10編を収録している。表紙に“TEN TALES OF LOVE”とあるように、「愛」に関する作品集との定義のようだ。尤も、10編の作品のほとんどが悲劇的結末、或いは些か狂氣的夢幻的結末を有するものであり、作者の言う所の「愛」とは何かということも興味深い。こうした「愛」に関する描き方については、次のような批判がなされている。

張悦然の筆による愛情は大いに問題があると私は思う。彼女の描く愛情とは、電話をかけたり、E-mailを送ったりということに頼りきった、一種現代的な恋愛の型なのだ。主人

公の心の内に愛はあるが、それは決まって結果や肯定を得るすべがない。何故なら、彼らは自分自身をすら信じていないようだからだ。こうした愛情がプラトニックに近いものだと言うなら、明らかに滑稽である。⁹

この批判者は張悦然を「単に修辭が奇異で、美辭麗句をこねくり回している若者に過ぎず、現実生活の冷静な再現者ではない」と言い切っている。一方で莫言は、張悦然を現実より高みにあるという評価を与えている。

彼女（張悦然：引用者注）は小説によって、現実より高次の生活を造り上げ、こうした生活に向って豊富かつ密生した触覚を伸ばしているのだ。彼女の作品には現実を凌駕した巨大な衝動と警戒心を高めさせる批判の力が満ちている。¹⁰

張悦然自身は、《十愛》の序において次のように語る。

これら 10 編の小説自体に関しては、私はこれらは私のこれまでの短編小説とは大きく異なると思っている。これら 10 編の小説は、より一層激烈さを増しているのだ。血を流し、引き裂き、折れ、引き砕く音がするだろう。それは生き生きとした愛であり、あまりにも激しく活動しており、到底抑えきれない躍動する脈拍のようだ。これをどのようにして慰め、静めたらいいのかわからない。しかし、私はそれらの様子を見るのが好きである。まるで私がずっと好きだった人魚姫が大海原に飛び込み、すぐ泡沫に变じ、その後はじけてなくなってしまったように、そんな過程が好きなのだ。これは暴力ではない。私が思うに、これらは愛の爆破、愛のなり得る転化なのだ。¹¹

これによれば、張悦然は自身の作品が激情的な性格と些か残酷めいた結末を持つ所に、生きて躍動する「愛」の愛たる所以を見出していると言えるだろう。

さて、〈堅琴，白骨精〉はこの《十愛》の 2 編目にあたり、2900 字余りの短編である。単行本収録以前には雑誌掲載はなかったようだが、単行本刊行後は幾つかの雑誌に転載された。物語の概略を以下に示そう。

小白骨精は美しい骨の持ち主である。彼女の夫は楽器師であり、小白骨精か

ら骨を貰って楽器を製作している。夫は現在、堅琴を作っている最中だが、この堅琴には小白骨精の骨が37本使われている。小白骨精は体中から骨を抜かれ、既に一人で立つことも出来ない状態になっていたが、作りかけの堅琴の快い音色に浸るのが好きであったし、何よりも愛する夫に喜んでもらえるのが嬉しくてならなかった。冬が近付き、小白骨精はふさぎの病に罹っていた。最後の1本の骨を夫に抜き取られた彼女は、夫の留守中、堅琴から元々は自分の骨であった美しい純白の絃を「借りる」と、体に突き刺し、一人で死んでいった。夫が彼女の遺骸から骨を取り出した時、その骨は変色してまだらが出来ていた。後に、黒く醜くなったその骨は、小白骨精の墓に位牌として立てられた。

全体的に甘い感傷に満ちた物語である。日本における張悦然紹介者である桑島道夫氏は「非常にナルシスティックで耽美的な作風」¹²との評を寄せている。また、作品から受ける印象は、堅琴などのイメージから西域風・異国風である。そもそも、国籍や時代の設定などもされていないのだろう。ヒロインを指す「小白骨精」も本名であるはずがなく、体中から骨を抜かれても生きているという設定であるため、この小説は一種のファンタジーとして理解するのが正しいだろう。こうした人ならぬ人を登場人物(?)にした作品は、六朝の志怪小説や唐代伝奇を挙げるまでもなく、中国文学においては長い歴史がある。《十愛》中の〈宿水城の鬼事〉も古代中国を舞台にした怪談的色彩の濃い作品であり、張悦然作品としては特に珍しい手法という訳ではない。

また、「白骨精」と言えば、中国では《西遊記》に登場する妖怪として有名である。屍が千年を経て変化した白骨精は美しい女性の姿となって、三蔵法師の命を狙わんと孫悟空一行に近付くのである¹³。京劇《孫悟空三打白骨精》では、美貌の妖怪白骨精と孫悟空の立ち回りが見所となっている。それらに鑑みれば、〈堅琴、白骨精〉においても、「小白骨精」は美しい妖怪としてのイメージを喚起していると言えるのではないだろうか。

3. 『人魚姫』のモチーフ——報われぬ愛

1. で述べた通り、張悦然が〈堅琴、白骨精〉は『人魚姫』の翻案だと述べて

いるのは、〈豎琴，白骨精〉において、ヒロイン小白骨精が愛情のために体の一部を代償とし、最終的に自死を選ぶ様を描いていることによる。『人魚姫』（中国では《海的女兒》という題である）は張悦然の好きなモチーフのようで、他の作品にも『人魚姫』の翻案があるとの指摘がある。¹⁴

ここでアンデルセンの『人魚姫』について確認しておこう。人魚姫は難破した船から王子を救い、彼に恋をしたために、魔女に頼んで自らの美しい声と引き換えに人間の脚を手に入れる。人魚姫は王子の知遇を得つつも、声が出ず、話せないために、自分こそが命の恩人であるということを王子に知らせることが出来ず、王子は他の女性と結婚してしまう。王子と結婚できなければ海の泡となるしかないという運命を予め魔女から告げられていた人魚姫は、剣で王子を刺し殺せば泡にならずに済むという姉たちの説得を一時は受け入れるが、愛する王子を殺すことが出来ず、海に身を投げ泡となる。最後に、人魚姫は空気の精となって空へ昇っていく。¹⁵

〈豎琴，白骨精〉と『人魚姫』の最大の共通点は「報われぬ愛」だろう。どちらも愛する男性のために、片や骨を、片や声を差し出す。双方のヒロインとも元々美しい骨・美しい声が自慢であった。しかし彼女達は、自慢の骨や声を引き換えにしても、自らの愛が顧みられることがなかったために死を選ぶしかなくなるのである。人魚姫は王子の婚礼の晩に、翌朝には海の泡へと変じねばならないつらさを感じている。

姫のかよわい足は、鋭いナイフで突き刺されるようでした。けれども、その痛みはすこしも気になりませんでした。それよりも、心を突き刺すような痛みのほうが、ずっとこたえました。（中略）王子のために、姫は家族を捨て、故郷を捨て、美しい声までも捨てて、毎日、かぎりない苦しみを忍んできたのです。（中略）魂をもっていない、そして、いまではもう、その望みもなくなった姫を待ち受けているのは、考えるということもない、夢をみるということもない、永久のやみ夜ばかりです。

実際は海の泡になることよりも、人魚姫にとっては愛する王子に顧みられなかったことの方がつらく悲しい。それゆえ姉達から「王子を殺せ」と手渡され

た短刀を持つ手が躊躇うのである。

姫は鋭い短刀をじっと見つめては、また王子の上に目をこらしました。その時王子は夢の中で花嫁の名をよびました。王子の心の中にあるのは、花嫁一人だけだったのです。人魚姫の手の中で、短刀が、ぶるっ、ぶるっと震えました。——と、その瞬間、姫は短刀を遠く海の中へ捨てました。

又、愛する王子を殺そうというその瞬間に、王子が自分の名ではなく、花嫁の名を呼んだというのは人魚姫にとっては決定的であった。たとえ夢を見、憧れようにも、それすら許されない現実を目の前に突き付けられたのだ。そしてその結果、人魚姫は海に飛び込む。

王子との結婚を夢見て破れた人魚姫とは対照的に、小白骨精には夫がいる。では、夫婦という一見相思相愛で結ばれた形をとっている小白骨精は、何故自死を選択したのだろうか。実際、小白骨精の夫は妻を愛していない訳ではない。度々妻に「僕がどれほど君を愛していることか」(一)¹⁶、「可愛い人よ、君が一番素晴らしい、君は永遠に最高だ」(二)、「僕は永遠に君を愛しているよ」(三)と囁きかける。ところが、小白骨精が夫に自分の骨を捧げ、夫に喜んでもらうことを無上の喜びとしているほどには、小白骨精を愛しているようでもない。

夫は目を輝かして、そのきらきら光る骨を見つめていた。(一)

彼は寝床へ駆け寄ると、骨がなくなってふにやふにやと弱々しくなった小白骨精を抱き上げ、いとおむように彼女の残り少なくなった骨を愛撫しながら、震える声で告げた。

(二)

二つの鎖骨は彼女がわざと白い裳の外にさらすと、骨の天然の光沢が、ほのかに赤みがかった皮膚の内から淡くしみ出して見えた。楽器師はそんな彼女をじっと見つめ、魅入られたかのように彼女の後について行くのだった。(三)

堅琴の真ん中に、特に尖って鋭い絃が1本ある。(中略) 夫は手のひらでゆっくりとそれを撫でるのが好きだった。顔には彼女を愛撫するときよりもずっと満ち足りた表情が浮かんでいた。(五)

これらの引用から、夫は小白骨精自身と比すと、彼女の骨をより愛しているのではないかという疑いが生じる。小白骨精の夫は前述のように楽器師であり、彼女の骨を用いて楽器を制作しているのだが、仕事に骨が必要であるという以上に、美しい骨への強い執着、フェティシズムがあるのだ。妻を愛するよりも、妻の骨から作る美しい楽器の数々を愛しているのである。更に「ああ、愛しい人よ、僕は君にどう感謝すれば良いんだろう。」(一) というセリフからは、楽器師の夫は美しい骨を提供してくれるがゆえに妻小白骨精に感謝し、彼女を愛しているということが窺えよう。そして小白骨精は、夫にとって自分が美しい骨ゆえの存在であると理解しているのだ。

人魚姫と小白骨精の求めている「愛」は、自分の王子・夫への愛と等価等量の愛情である。しかし、人魚姫は、「僕はおまえが一番好きだよ」と王子から言われ、可愛がられながらも、彼女を唯一の女性と見なし、妻とするほどの愛情は得られなかった。一方、小白骨精は、自分の骨が全てなくなったら、夫が愛してくれなくなるだろうということを本能的に恐れ、そうなった以上は自分がこの世に存在する価値などないと思いつめている。彼女が自らの骨を失って行く中でふさぎの病に罹り、主体的に死を決意するのは、自身の生存における存在価値を、夫の眼を通して、自身の美しい骨にのみ見出していたことによるだろう。

しかし、今では小白骨精は自分の置かれた状況を心配しないわけにはいかなかった。彼女はもともと痩せて骨と皮だけの女性だったが、今ではほとんど全ての骨を失い、体はますます軽くなった。ますます軽くなり、彼女は本当に凜さながらひらひらと舞い上がっていきそうだった。(中略) 小白骨精は、自分が突如として風に吹き飛ばされたら、夫にもう二度と会えなくなるのかもしれないのだと思った。「私はさよならの一言すら彼に言えないのね」それはどれほどひどく、つらい状況だろう。(四)

小白骨精は骨を失い、軽くなった体を心配し、自分が風に吹き飛ばされて夫に会えなくなることを不安に思っているが、心の底では美しい骨を全て失った自分は、夫に愛されるはずがないと悟っているのである。夫は彼女に「君が全

ての骨を失ったからといって、それが何だと言うんだい。」(三)と聞き聞かせてはいる。しかし、小白骨精は、夫の言うような「永遠」などないということを知っていた。骨を全て失った後に、夫が自らをどのように遇するか、そのような不安を抱えたまま生き続けるわけにはいかない。夫の愛情のみに依存している小白骨精が、骨を1本又1本と抜かれていく過程は、自死へと続く彼女の自己喪失の過程であり、自死を選択したということは、絶望を封じ込めるための自己欺瞞であったのではないだろうか。

小白骨精が自死の際に用いた骨は、元々は「最もきらきらと光り、徹底的に削られ」、「比類なく美しい」、「純白」の骨であった。小白骨精の夫は彼女の遺骸から取り出したその骨を磨く。

夫は哀惜の念に堪えない様子で、その後世に伝わる宝とも言うべき骨を拭いていた。彼は地質が柔らかく、値段の張る緞子をいろいろ買って来ては、骨をこすってきれいにした。しかし、骨はますます黒くなった。まるで猛毒を飲み込ませた象牙のように黒かった。夫はひどく悲しんだ。(六)

小白骨精の考えは正しかった。夫は小白骨精の死後も、彼女自身ではなく彼女の骨の方をいとおしんだのである。

4. 愛妃の骨を琵琶にした古代の残虐王と張悦然の初期作品〈残食〉

さて、愛する女性の骨を楽器にするという、この突飛とも言うべきモチーフは、張悦然の筆に拠るより先に例がある。古代北齊の初代皇帝文宣帝(529-559)のエピソードである。文宣帝高洋は、《資治通鑑》において「酒を嗜み淫佚にして、肆に狂暴を行ふ」¹⁷と記されたほどに、稀に見る酒乱の残虐非道な皇帝として、幾つもの逸話を残している。史書に見られる文宣帝の非道ぶりを見てみよう。

通りすがりの女性に「今の天子はどうだね？」と尋ね、天子本人と知らない女性が「頭のおかしな狂人ですよ。どうして天子なんて務まるものですか」と

答えたのに腹を立て、あっさりその女性を殺してしまうなどは序の口で、悪酔いしている文宣帝を、実の母親である婁太后が杖で打ち据え叱責すると、「老母は胡人に嫁にやっつてしまえ」と言い返し、太后が立腹し口も利かないでいると、母親が身を横たえている長椅子を引っ繰り返すという暴挙に出ている。長椅子から転がり落ちて怪我をした母親を見て、やっと酔いが醒めた文宣帝は恥じ入り、臣下に命じて自分を杖で打たせるなどして、太后に許しを請うたという。又、妻李後の実家を訪ねた折、今度は李後の母親を鎗矢で射ると「俺が酔った時には母の太后だって眼中になしだ。老婢が何だって言うんだ」と罵った。挙句の果てには、その場で馬の鞭を振り回し、滅茶苦茶に打って回った。

更に暴挙は増す。臣下の一人が死んだ時、その妻に「夫を思い出すか？」と尋ね、「思い出さないことはありません」との答えを得ると、「ならば、夫に会いに行くがよい」と彼女をばつさり一斬り、頭部を放り捨てた。

この文宣帝は長い鋸等の処刑道具を備えており、酔うたびに人を殺して戯れていた。それもただ殺すだけでなく、死体を解体したり、火で焼いたり、水中に投げ込んだりしたのである。臣下の者は仕方なく、死刑囚を集めた檻を用意し、文宣帝が人を殺したくなった際には、その中から選んで生贄にしたらしい。ここまで行くと文宣帝は単なる酒乱ではなく、明らかに精神に異常があったと断じることができるだろう。

この文宣帝には薛氏という側室がいた。

所幸薛嬪、甚被寵愛、忽意其經與高岳私通、無故斬首、藏之於懷。於東山宴、勸酬始合、忽探出頭、投於柎上。支解其屍、弄其髀爲琵琶。一座驚怖、莫不喪膽。帝方收取、對之流淚云：「佳人難再得、甚可惜也。」載屍以出、被髮歩哭而隨之。¹⁸

(幸する所の薛嬪、甚だ寵愛を被るも、忽ち其の経て高岳と私通せるを意ひ、故無くして斬首し、之を懷に藏す。東山に於いて宴し、勸酬始めて合ふや、忽ち探りて頭を出だし、柎上に投ぐ。其の屍を支解し、其の髀を弄びて琵琶と為す。一座驚怖し、喪胆せざるなし。帝方に收取し、之に対して涙を流して云ふ、「佳人 再びは得難し、甚だ惜しむ可きなり。」屍を載せて以て出だし、被髮歩哭して之に随ふ。)

文宣帝が寵愛していた側室の薛氏を、かつて清河王高岳と関係があったと疑い、首を斬って殺したというくだりである。更にもその首を懐に入れ、宴会に赴くと、懐からその首を大皿の上に投げ出したというのだから尋常ではない。体の方は解体し、太腿の骨を琵琶にすると、席上の一同が恐れ慄いている中、泣きながらその琵琶をつまびきつつ、古代の詩句を口ずさみ、死体を載せた車の後を、髪を振り乱してヨロヨロとついて行ったという。

「一座驚怖し、喪膽せざるなし」とあるように、文宣帝の振る舞いは異常で猟奇的としか言いようがない。この件より以前に、文宣帝は薛氏の姉も、父親を引き立てて欲しいと頼んできたのが気に入らず、鋸引きにして殺しているのだ。しかし、おそらく文宣帝においては、薛氏を愛しているがゆえに彼女の過去を許せず、また愛しているがゆえに死体を捨てるのではなく、解体し、琵琶としたのだろう。酔っていたとは言え、「佳人再びは得難し、甚だ惜しむ可きなり」と歎いたのも戯れではなく、その時点の限りにおいては心底悲しみを感じていたに違いない。前述の母親に対する暴挙も、酔いの醒めた後に正気に返り、ひたすら許しを請うている所からは、孝心や反省心を完全に欠いているとも思われぬ。彼を奇人たらしめているのは、感情面が常人と異なる点にあるのではなく、善悪の判断をせず、自己抑制することなく感情の赴くままに行動している点にあるのだろう。

文宣帝が薛氏の骨から作った琵琶を手にとって口ずさんだという「佳人再びは得難し」の句は、元々は漢の李延年の歌である。

北方有佳人（北方に佳人あり）

絶世而独立（絶世にして独り立つ）

一顧傾人城（一顧すれば人の城を傾け）

再顧傾人国（再顧すれば人の国を傾く）

寧不知傾城与傾国（いづくんぞ傾城と傾国とを知らざらんや）

佳人難再得（佳人再びは得難し）¹⁹

李延年の歌を聴いた漢の武帝は、李延年が自らの妹のことを歌ったと知り、

早速その妹を召し入れ、果たして類稀なる美女であったその妹を寵愛するようになったという。佳人薄命の例に漏れず、李夫人は若くして亡くなったが、病床にある時に容貌のやつれを帝に見せまいとし、結果武帝の心中には美しく艶やかなままの李夫人の面影が残った。武帝はそのような彼女の死を悼み、自らの陵墓の隣に葬り、又甘泉宮に肖像画を掛けて偲んだという。後に白居易も新樂府「李夫人」を詠んだように、李夫人は武帝の寵を一身に受けた絶世の「佳人」だったのである。文宣帝も嫉妬に狂い、自分で薛氏を殺しておきながら、それでも愛妃の死を惜しみ、「佳人は二度とは手に入らないものだ」と涙ながらに感じ入ったのではないだろうか。

ところで、張悦然は1999年に雑誌《青年思想家》に短編〈残食〉²⁰を発表している。この作品は水槽中の熱帯魚の共食いを通して、愛情のあり方を考察した散文的な小説である。粗筋を以下に示す。

「私」は「淡いブルーで透明に輝き、様々な色のまだらがあり、フレアースカートのように美しい尾鰭」を持った熱帯魚に魅せられ、2匹購入する。2匹は夫婦であり、夫は「ほっそりとして、体に銀色の模様と、頭の上部に暗白色の輪があり、それが天子の輪のように」美しい妻を愛し、妻も夫を愛していた。

水槽にはブルーの魚夫婦の他に、大きな魚が1匹と黄色い魚が2匹いた。ブルーの魚の夫は、まず大きな魚を食い殺し、続いて黄色い魚のオスも食い殺す。この殺戮に妻は黙って従うばかりである。夫は更に黄色い魚のメスも食い殺すが、妻は「夫婦の魚は生も死も一緒であるべきだ」と考え、黄色い魚のメスの死についても、「これで彼らは一緒にいられる」と思うのであった。

ブルーの魚の夫の眼に、妻は今も尚美しく映っていたが、それは最早餌としての美しさに過ぎず、夫はとうとう妻をも食い殺してしまう。妻は抗わず、従順に死んでいった。これらを目撃していた「私」は、妻の願いは、来世では夫と苦境においても互いに助け合うような愛情を持つことであり、彼女の死もその願いを叶えるための結果なのだと考える。夫は妻を食い殺したことを後悔し始め、ある日、水槽を自ら飛び出し死んでしまう。「私」は、来世では彼が妻に美しい愛情を捧げることを信じて、2匹を合葬した。

妻を食い殺すという残酷な魚の姿を描いてはいるが、ラストで「私」が来世

での2匹の幸せを信じる所には、張悦然の愛への期待が仄見える。夫を愛する従順な妻が死に至るという展開の面で、この〈残食〉は〈豎琴、白骨精〉と通い合っているが、大きく異なる点は、ブルーの魚の妻が来世を期待し、自己犠牲的に黙って食い殺されていくだけであるのに対し、小白骨精は自ら死を選ぶという点である。小白骨精は夫との愛の問題を自分自身の問題へと変換し、最終的には自己存在を否定したのである。

ここで〈豎琴、白骨精〉の作品世界に立ち戻ろう。小白骨精の夫は、完全に妻の骨に依拠して楽器を制作していた。笛や簫なども作ってきたが、豎琴は彼が最も出来栄えに満足している作品である。

豎琴には小白骨精の骨が全部で37本使われているが、この数は今まで作ったこうした楽器よりもずっと多い。豎琴の外側の枠組みは、鎖骨や腕の骨のように硬めの骨でできていたし、肋骨のように丈夫でしなやかな骨も使っていた。(中略)彼の弛まぬ努力で、それらの骨は象牙のような光沢が出るまでに磨き上げられていた。夫が一寸ほどの爪をそっと豎琴に滑らせると、旋律の一つ一つの音が空気の中からたちのぼり、あたかも重さのない水晶のように、明るく燃える三基のともし火のもとでまばゆく光るのだった。

(二)

豎琴は夫の渾身の作品であった。豎琴の見栄えや奏でる音の美しさは夫を自己陶醉の世界に導き、夫は骨を提供してくれた小白骨精に謝意と愛情を表す。小白骨精の骨がなければ、自分の素晴らしい作品もあり得なかったのだから、夫の妻への感謝と愛情それ自体には疑いを挟みようはないだろう。

しかし、小白骨精の死後、妻の死よりも白く美しかった骨が黒くなってしまったことを歎く夫には、非情なエゴイズムを感じ取れはしまいか。おそらく、彼には妻が何故死んだのかを真には理解できなかったに違いない。

骨はとうに緋色に変色してしまっており、しかも点々とまだらもあった。骨は、純白でしみ一つない豎琴には、明らかにもうふさわしくない。(六)

この一文は夫の主観としては書かれておらず、あくまで地の文であるが、夫の真情を表している。彼は自分の芸術作品が既に完璧ではなくなってしまったことを、恨みとも悲しみともつかない思いで受け止めているのだ。

〈残食〉のブルーの熱帯魚の夫は、妻を食い殺した後に妻の価値を知る。

彼は又何日かは干しミジンコを餌としたが、たえず彼女を偲んでいた。おとなしく、従順だった彼女を。彼は食べた彼女が自分の心の内にはいるのではないかと疑い、彼女を思うと心がかき乱され、張り裂けそうに痛むのだった。彼はやっとわかったのだ。彼が自分の花嫁とした彼女の価値は、一回の正餐にする価値などよりはるかに優っていたのだと。彼は悔い始めた。

ブルーの魚の夫の自殺は、妻への情愛が生存のための欲望に負けたことを恥じ、悔いた結果のものである。語り手である「私」は、夫の死に妻の夫への一方的な愛だけではなく、夫から妻への返答を見出し、残酷な愛の結末に来世への希求を得ている。2. において、張悦然の言う所の「愛」とは何かについて言及したが、〈残食〉で愛への期待を見せた10代の少女は、数年後に〈豎琴、白骨精〉で期待の持ち得ない、より身体的痛みを伴う愛の結末を示した。本人の言葉借りれば、彼女の愛情観は「より一層激烈さを増し」、「血を流し、引き裂き、折れ、引き砕く音がする」ものになったということであろう。

寵妃薛氏を殺し、死体の骨で楽器を作るという猟奇的な面を見せながらも、薛氏を失ったことには悲しみを感ずる暴虐王文宣帝。愛する妻を食い殺し、その後、後悔と妻への思慕の果てに自殺をするブルーの魚の夫。そして、普段は妻の骨から楽器を作り、彼女を愛していると言いつつも、妻の死後は骨の方をいとおしみ歎く小白骨精の夫。彼らは果たして誰がより冷酷なのだろうか。又、王子が夢うつつに呟いた花嫁の名前を聞き、絶望に打ちのめされて自死を選ぶ人魚姫と、夫への愛を来世に期待して、抗わずに従順に夫に殺されていったブルーの魚の妻と、普段は「君が一番素晴らしい、君は永遠に最高だ」と甘く囁かれても、死後に夫の真情が明らかになった小白骨精とでは、果たして誰がより憐れなのだろうか。

文宣帝のエピソードは、おそらく〈堅琴，白骨精〉の典拠や来源ではない。しかし、愛する妻の骨を楽器にしたという素材の共通点か〈堅琴，白骨精〉を見、夫によって文字通り食べ物にされる妻という〈残食〉との共通点から〈堅琴，白骨精〉を見た時、この作品の底にあるものがより浮き彫りになって来るように思われる。

5. 結び

以上、張悦然〈堅琴，白骨精〉の作品世界を、『人魚姫』と北齊の文宣帝のエピソード及び張悦然の初期作品〈残食〉との比較検討を通して見てきたが、ここで明らかになったのは、〈堅琴，白骨精〉に描かれた愛情の冷たく残酷な結末である。一読、異国風の描写と悲哀に満ちたラストに気を取られがちであるが、小白骨精の自死の蔭には、彼女の夫への愛と夫の骨への偏愛という絶望的な乖離と断絶があったのである。

実はこの愛情の残酷なありようは、タイトルに象徴的である。主人公たる「小白骨精」ではなく、「堅琴」が先に来ているのである。夫が妻の骨から作った堅琴を妻自身よりも愛し、重要に感じていれば、妻は妻で夫が自分より骨を愛しんでいるのだから、骨を全て失った自分には価値はないとすら考えている。2人ともが小白骨精自身よりも骨からできた「堅琴」を重んじたのである。夫を残しての小白骨精の自死は、彼女の強い自己喪失感と自己否定を考えれば、必然の帰結であったのかもしれない。

張悦然の創作に関しては、次のような指摘がある。

張悦然の最大の難点は内在的な経験の乏しさである。(中略) 基本的な生活経験を欠いた女性文学の創作など空中楼閣のようなものだ。(中略) 悲劇とは価値のあるものを破壊して人に見せるものだが、こうした病的傾向があり、残酷でぞっとさせられる、血生臭い殺戮の描写が「悲劇的要素」²¹ などと言えるのだろうか?²²

前半の生活経験の不足の指摘は、若い作家に向けられる批判としては、今後

改善の見込まれるものであるため、さほど厳しいものとは言えまい。現に2008年に起きた四川大地震を受け、張悦然は近年では生活感や市井に生きる人々の実感の籠った〈家〉(2009年)を発表するなど、「生活経験」を積みつつあることを読者に感じさせている。問題は後半の「悲劇的要素」である。確かに「病的傾向があり、残酷でぞっとさせられる、血生臭い殺戮の描写」だけでは「悲劇的要素」とは見なせないだろう。しかし、夫婦が相思相愛であるかに見える生活の中で、妻が夫に骨を1本又1本と抜かれていくにつれて、自分自身をも見失っていき、病んだ末に死を選択するというテーマは、決して「病的傾向があり、残酷でぞっとさせられる」だけのものではない。ファンタジーのような表現形式を取っていても、小白骨精の自己喪失感や強い自己否定に力点が置かれており、それは寧ろ現代においてこそ読み手に共感や痛みを覚えさせる普遍的な主題であるとは言えないだろうか。とりわけ、張悦然の主たる読者である若者たちは、彼女の小説の中に自らの無力感や徒労感、自己否定感を見出しているのではないかと思われる。

張悦然は、単なる商業主義の一波の「八〇後」の「美女作家」という括りの中に埋もれてしまうのか。或いはそこから脱け出し、時代の文化を牽引していくのか。はたまた或いは既に「八〇後」「美女作家」群から脱け出しているのか。それについては今後長期的に彼女の活動を見つつ、判断するべきであって、即断は避けることにしたい。しかし少なくとも、自己喪失の鈍くも決定的な痛みを、夫に骨を抜かれるというメタファーに仮託し、読者の強い共感を喚起した筆力の冴えだけは確かに評価できるように思われるのだ。

¹ 法政大学国際文化学部 HP http://www.hosei.ac.jp/kokusai/NEWS/topics/120914_01.html (2012年11月1日現在閲覧可能)

² 邦訳は桑島道夫訳『上海ベイビー』文春文庫2001年3月

³ 2002年に江蘇少年児童出版社から《竇蔻流浪記》を刊行した竇蔻は当時6歳。中国における作家の最年少記録を打ち立てた。

⁴ 作家馮驥才は「“創作の低年齢化”は文学現象ではなく、市場現象だ」と語っている。(《如何看待“写作低龄化”?》)

<http://www.people.com.cn/GB/kejiao/41/20020307/681627.html>

⁵ 莫言〈序:飛揚的想像与透明的憂傷〉(張悦然《葵花走失在一八九〇》作家出版社

2003年6月)

⁶ 白燁〈張悅然長大了——讀《十愛》〉

http://www.chinawriter.com.cn/zjzl/zjk/by/zxzyzp/646_2603.htm

⁷ 〈張悅然:小説は変形後の現実〉で「私の幾つかの小説は、実は注意して見ますと、どれも童話の翻案なのです。例えば(中略)(堅琴,白骨精)、それから《葵花走失在一八九〇》は、どちらも『人魚姫』の翻案です」と述べており、又〈張悅然:写作只為稀釈寂寞〉でも「アンデルセンの童話『人魚姫』のようだと思われるでしょうね。愛と代償の物語です」と語っている。また、張悅然作品における童話の影響は、《紅鞋》(上海訳文出版社2004年7月)に『赤い靴』のイメージ及び主人公カーレンの利己的な性格が投影されていることを指摘でき、また《十愛》中の〈鼻子上的珍妮花〉は主人公を木製の人形ピノキオとしており、カルロ・コッローディ『ピノキオの冒険』が下敷きになっていることは明らかである。上記の張悅然自身による解説は、それぞれ以下のサイトを参照した。

<http://mil.eastday.com/eastday/node7209/node7248/node7363/userobjectlai486638.html>

http://www.chinawriter.com.cn/zp/mtxy/115_70208.htm

⁸ 〈堅琴,白骨精〉は拙訳「堅琴よ、真白き骨を形見とせよ」(桑島道夫・原善編『現代中国文学短編選』鼎書房2006年12月所収)、〈二進制〉は加藤三由紀訳「二進法」(『火鍋子』第71号、翠書房2008年5月所収)、〈黒猫不睡〉は舟山優士訳「黒猫は眠らない」(中国現代文学翻訳会編『中国現代文学4』ひつじ書房、2009年12月所収)、〈家〉は拙訳による同タイトルで桑島道夫編『現代中国青年作家秀作選』鼎書房2010年10月所収、〈老狼老狼幾点了〉は拙訳「狼さんいま何時」(桑島道夫編『9人の隣人たちの声・中国新鋭作家短編小説選』勉誠出版2012年9月所収)として翻訳紹介された。

⁹ 恭小兵〈無謂的憂傷是一種病〉(黃浩・馬政主編《少年作家批判書》中国戯劇出版社2005年1月)

¹⁰ 注7莫言前掲文

¹¹ 張悅然〈写給令我癡癡忘食的愛(自序)〉(張悅然著《十愛》作家出版社2004年7月)

¹² 桑島道夫「新世紀世界文学ナビ・“新概念”作家の残酷と耽美」『毎日新聞』2011年6月30日

¹³ 《西遊記》における白骨精に関しては『西遊記・(三)』(吳承恩作、小野忍訳 岩波文庫1980年)を参考とした。

¹⁴ 趙静〈冷眼閱讀張悅然〉(《山東文学》2006年第2期)の指摘によれば、《櫻桃之遠》、《覓路》も〈堅琴,白骨精〉、《葵花走失在一八九〇》とともに『人魚姫』の翻案である。

¹⁵ 『人魚姫』に関しては大畑末吉訳『完訳アンデルセン童話集(一)』(岩波書店1981年6月)に基づく。引用も同書に拠る。

¹⁶ 〈堅琴,白骨精〉のテキストは《十愛》(作家出版社2004年)に拠り拙訳。又、括弧内の数は章を表す。

¹⁷ 《資治通鑑》卷第一六八。テキストは中華書局1956年6月版。書き下し文につ

いては、金沢大学教授矢淵孝良先生のご指導を頂いた。又、文宣帝のエピソードに関しては、《資治通鑑》、《北史》（中華書局 1974 年 10 月）、《北齊書》（中華書局 1972 年 11 月）を参考とした。

¹⁸ 《北史》前掲書

¹⁹ 《漢書》第十二冊〈外戚伝〉。テキストは中華書局 1962 年 6 月版。

²⁰ 初出は《青年思想家》1999 年第 1 期。これは張悦然の高校在学中に当たる。引用は《葵花走失在一八九〇》（作家出版社 2003 年 6 月）所収のテキストに拠る。

²¹ 「悲劇的要素」とは、白燁が注 6 前掲文において張悦然賞賛の際に用いた。「（張悦然は）日常生活における愛の素材をとらえるのにますます長け、愛の中の悲劇的要素を掘り出すのにますます秀でていく」とある。

²² 注 14 趙静前掲論文

A Study on Zhang Yueran and Her Short Story *Harp and White Bone Demon*

SUGIMURA Akiko

It is commonly believed that Zhang Yueran, who was born in the 1980s and started writing at the age of 14, is a typical “post-’80s writer”. However, her novels and short stories are widely read and have many young enthusiastic fans, and therefore it is obvious that her works have something to spark interests among the readers.

This paper compares and analyzes *Harp and White Bone Demon* by Zhang Yueran with *Little Mermaid* by Hans Christian Anderson and an episode of ancient China Northern Qi Dynasty, all of which are stories of love and cruel sacrifice.

Analysis of the three stories shows that Zhang, compared to Anderson and the episode of ancient China, tends to think that the more tragic and cruel love is, the more beautiful it is. The finding implies that self-confidence and self-negation of heroines of these stories mirror the youth’s feeling of oppression in the present China. The Chinese young readers who feel gloomy and pressure see themselves in her tales of tragic love.